

国語擬聲語の原始形態

小嶋孝三郎

まへおき

曩に私は「擬聲語の言語的性格」と題して、研究対象としての擬聲語の輪郭を描いてみた。(説林第三卷第六一—一七号、中第一〇号を除く、一九五一年六一—一月) その際は期せずして「わが国語に於ける擬聲語発達の原因は何か」といふ大きな問題に逢着した。しかし、その問題を解明する為には、国語発達の史的考察と、世界諸国語の比較研究によらねばならないことを痛感した訳であるが、ここでは単に文法的な角度から一応の試論を提出するに止まつた。小論は、国語に於ける擬聲語が疊語といふ形態によつて、著しく発達して来てある事実に着目し、これを上代語の資料に基づいて検討してみたものである。

国語に於ける擬聲語発達の要因が如何なる点に存するかといふことは、最近擬聲語がわが国語の一大特質として漸く注目されるやうになつた現段階に於いて、極めて興味をそゝられる問題であり、この纏りのない考察の中から、多少なりともこの方面に關心を引用した。右を要約すると、①国語には擬聲語中特にその二重語(所謂疊語—音節反復の形態を有する語彙)が豊富である。②それは形態的にみても、人類原始時代の遺物ともいふべき自然的本能的言語の伝統である。③日本人はかなり進歩してゐるにも拘らず、今日なほかゝる幼稚な時代の言語使用に甘んじてゐる等である。

右の諸点から、果して、現代語の表現に於ける擬聲語そのものまでも、前世紀の化石的な言語の伝統として、且つ又、その事がわが国語未発達的一面を露呈するものと見做し得るかどうか、等といつた点に就いて、殊更に仰々しく取り上げる必要を感じない。何故なら、茲で問題としてゐるのは、擬聲語そのものではなくして、擬聲語中特に疊語の形態をとるものに限られてゐるのである。擬聲語全般に就いて云ふならば、既に言文一致以来、わが国近代文学に於けるその效用は、極めて広範な領域と、高度の水準とに達してをり、それが今日では愈優れた文章詩語として洗練され彫琢されつゝあるのである。

それ故、小論の順序としては、先づ国語に於ける擬聲語の多寡ではなくして、その中で疊語の形をとつてゐるもの多寡に就いて考察し、次いで、それらが仮りに豊富であつた場合、果してその形態が言語の原始の様相と見做し得るか否か、といふ問題に觸れる訳であるが、それらに對す

をもたれる人々に、研究の端緒が見出されれば、俾せと思ふものである。

1

擬聲語に就いての二重語。この種の日本語は非常に豊富である。ある擬聲語はその意味からも発音からも面白い。すこし挙げてみよう、一びしよびしよ、ぶるぶる、ちよぼちよぼ、ころころ、じりじり、べたべた、これらの言葉は親しい会話によく使はれるが、それは多分、次に記す理由によつて説明されよう。擬聲語なるものは、言葉がまだ不足なので、ある一定の状態に生ずる事物の音を模して個々の区別が理解され得るやうにした幼稚な時代の言語を示すものである。猿の言語に近い、まつたく、化石的言語なのである。日本国民は、非常に進歩してはゐるが、祖先の発してゐた噎れ声の叫びで表はされた言葉を伝統的に使つてゐる。

(ザンセスラオ・デ・モラエス)

私は先づ問題の緒を見出す為、便宜上この様な常識論

る解答は敢へてすることなく、わが上代国語は果して如何なる相貌を呈してゐたかといふ点に就いての調査を報告して、その解答を将来の問題としたいのである。以下右の諸点に就いて、逐次検討してみることとする。

2

わが国語に於いて擬聲語が如何に豊富であるかといふことは、これを欧米諸国の言語と比較することによつて、はじめに論証し得ることであらう。しかし、その点に就いては、今日迄随分多くの先学が指摘してゐるものの、未だ真に信頼するに足る科学的調査に接してゐないのは遺憾である。この問題は単に諸外国の国語辞典からその語彙を摘出してその数量を比較するだけでは不十分であつて、諸外国の日常会話なり、その代表的な文学作品を詳細に比較検討する時、はじめにその実態を究明し得ると云へよう。従つて、この問題は単に語彙数の多寡といふ様なことだけではなしに、該語彙使用の頻度や更にはその意味形態用法等に就いて実証し、その統計的研究に俟たねばならない。

そこで私は取敢へず次の様な諸例をあげて、わが国近代文学に於ける擬聲語效用の一半を窺つてみよう。

傍の坐鋪の障子がスラリ開いて、年頃十八九の婦人の首、チヨボンとした摘ッ鼻と、日の丸の紋を染抜いたムツクリとした頬とで、その持主の身分が知れるといふ奴が、ヌツト出る。(二葉亭

四迷「浮雲」

鼻筋つんと通り眼尻キリ、と上り、洗ひ髪をぐる／＼と酷く丸めて引裂紙をあしらひに一本簪でぐいと留めを刺した色気無の様はつくれど（幸田露伴「五重塔」）

はらりと下る前髪の毛を黄楊の鬚櫛にちやつと掻きあげて、伯母さんあの太夫さん呼んで来ませうとて、はたはた駆けよつて袂にすがり（樋口一葉「たけくらべ」）

何の時とも知れず、ばら／＼と鳴り、かさ／＼と音がして、ばつと檜笠にかゝることもある。（泉鏡花「高野聖」）

天主の松の上をふわ／＼飛んで、営所の中へ落ちた。次にぼんと音がして、黒い団子がしゆつと秋の空を射抜くやうに上ると、それが、おれの頭の上でばかりと割れて、青い煙が傘の骨のやうに開いて、だら／＼と真中に流れ込んだ。（夏目漱石「坊ちゃん」）

烈しい西風が、目に見えぬ大きな塊をごうつと打ちつけては又ごうつと打ちつけて、皆瘦せこけた落葉木の林を一日苛め通した木の枝は時々ひう／＼と悲痛の響を立てて泣いた。木の枝がざわ／＼と鳴る。世間が俄に心ぼそくなつた。（長塚節「土」）

右はそれぞれ自然の音響或ひは事物の状態をよく感性的に模写したものであるが、茲にその形態に就いてみる時、所謂疊語の形式をとつてゐるものは次の諸例である。

ぐる／＼、はた／＼、ばら／＼、かさ／＼、ふわ／＼、だら／＼、ひう／＼、ざわ／＼

さてこれらは孰れも二音節反復の類型に属するものであ

六二八語（五六%強）となる。従つて、これによつてもわが国語に於ける擬声語の形態中、如何に疊語が多量を占めてゐるかといふことがほぼ推察し得る訳である。

3

国語に於ける擬声語中、疊語の形をとるものが如何に多量を占めてゐるかといふことは、一応右によつてもほぼ窺ひ得るところであらう。さて然らばこれらの語彙は、形態的にみて、果して人間言語未発達の原始的様相を帯びるものであり、自然的本能的原始的言語の継承と断定せらるべきものであらうか。

嘗てセイスは欧州語に於ける疊語と、野蠻未開語に於けるそれとの量的な比率をあげて、前者に於いては千分の二語であつたものが、後者では千分の三八乃至一七〇語もあるといふ結果を得た。^{註1}尤もこの場合に於ける疊語とは、厳密に擬声語中の疊語を調査したものにあらずして、觀念語中の疊語、例へば国語では「深々」「軽々」「時々」等も含んでゐるとすれば、問題は別である。しかし、孰れにしても、未開社会の言語には、音節反復の形態を有する語彙が多いといふことだけは一応云ひ得る訳である。従つてこの調査から、疊語が未発達言語として、更には原始時代の言語の伝統として考へられる一つの理由である。

第二に、児童語の研究に就いてのシテルンの報告によれ

り、その中でも「ふわ／＼」「ひう／＼」を除けば、他は悉く（aa/aa, 「ぐる／＼」だけは uu/uu）の形式をとる母音階調の形態である。国語の擬声語にみられるこのやうな疊語は、諸他の形態、例へば右の例文では、

（～ri-to）

すらり、はらりと、ほかりと……

（～r-to）

ぬつと、ぱつと、ちやつと、しゆつと、ごうつと……

（～n-to）

つんと、ぼんと、ちよぼんと……

（～ri-to）

きり／＼と、「ひり／＼・びり／＼・みり／＼」……

（～r-to）

ぐいと、「ほい・すい・つゝい・ちよい」……

（～ri-to）

むつくりと、「むつくり・ぼつくり・しつくり」……

（～kuri-to）

等と比較して、その数量の多いことが窺へる。即ち、このことは、国語の擬声語中、最も一般的類型として、先づ第一に疊語（音節反復の語彙）を挙げなければならぬのではないかと思はれる。

そこでこのことを証明する為に、国語擬声語の形態を分類調査した従来の研究、例へば小林英夫氏の「国語象徴音の研究」をみてみると、その語彙はすべて氏自身の使つてゐる現代語のみで一一四語を対象としてをり、これを「四種に分類して、その中で音節反復の形態と然らざるものとの比率は、前者の四八六語（四四%弱）に対して後者は

ば、自分の幼女の言語発達の（初期第一言語期）における語彙の統計で示すところによると、満一年半では、擬声語が全語彙の五〇%に及んだといふのである。^{註2}わが国の童謡でも、「ポツポツポ鳩ポツポ」「ボンポコポンのボン」「チイチイパツパチイパツパ」等々を数へあげれば、全く枚挙に遑のない程多くのものが、孰れも児童達に非常に愛好されてゐる理由は、その曲譜に秀れてゐる場合もあらうが、大抵はその歌詞中にこれら児童に親しみ易い擬声語が極めて効果的に用ゐられてゐるといふ点を決して見逃してはならない。^{註3}これを要するに、児童の使用する語彙中には慥かに擬声語が多いのであつて、このことは世界的にも共通してゐるのではなからうか。マンマ、ワンワン、モーモー、ガラガラ等といった幼児語の大部分のものが、孰れも疊語であり、これらが特に彼等に愛好されてゐる理由に就いては、大人達が彼等にこの種語彙を押しつけるからではなく、シテルンが云ふ様に「描写的身振のもつ自然性」であり、それが又疊語といふ音節反復の語彙形態の單純明確な点によるのであらう。従つて、斯様な事から、一般的にみて、言葉がまだ不足な彼等児童に、特に愛好される語彙として、所謂「幼稚な時代の言語」と見做される点であらう。

註1 高橋龍雄「応用言語学」二〇九頁。

註2 佐久間鼎「音声心理学」二七頁。

註3 講談社発行「童謡画集」には本邦に於ける最も有名な童謡を一応網羅してある。今その中から、擬声語を有するものと、然らざるものとの比率をみると、七五%と二五%であり、その七五%の擬声語を有する童謡中の半数迄が、該語彙の頻出するもの、又はそれが極めて效果的に使用されてゐるものである。なほ春秋社発行「日本童謡曲集」の調査では次の結果を得た。

全童謡数一七〇	擬声語を用ゐてゐるもの、一〇五	類出又は効果的なもの、六五
		(38%)
		二箇処に、四一
		出てゐるもの、(24%)
		六五…(33%)

第三には、常識的似而非進化論の齎した非科学的迷信である。例へば、人間は猿から進化したものであるといふ考へ方から、人間は進化してゐるが猿は一向進化してゐないとする様な、極めて素朴な考へ方である。右の「人間」の部分で「人間言語」、「猿」の部分で「擬声語」とすれば、擬声語が未進化の原始言語と見做す考へ方になるであらう。所謂「言語起源説」が人間言語の進化を単純且つ機械的に、①自然的原語時代。②観念語時代。③比喩象徴語時代といふ様な段階に分けて論ずる場合、それが如何に非実証的思辨的な常識論であるかといふことは、もはや論外であらう。然し乍ら、問題はその「自然的原語時代」の言語が擬声語であつたかどうかといふことと、仮りにさうであつた場合

れて来たか。この問題を解く為には、吾々は先づあたかも考古学者がするやうに化石的な言語の発見蒐集につとめ、現存するわが国古代の諸文献を資料として渉獵することはもとより、遠く琉球や奥州の方言はもとより、先住民族と目されるアイヌ語や、朝鮮、中国、南方諸民族等の言語資料を調査して、それらを比較言語学に取り扱ふ要があらう。かくしてはじめて有史以前のわが擬声語の相貌を推定し得ると思ふのであるが、さうした記録以前の問題は、実証主義の立場をとる限り極めて多くの困難を伴ふことであり、その重要さは認めるとしても、茲では触れない。そこで、現存するわが国最古の国語資料たる記紀万葉風土詞等から、上代の擬声語を拾つてみると、次表の通りである。

〔なほ以下次の諸本に基づく〕

古事記	訂正古訓古事記
日本書紀	国史大系本、岩波文庫本
万葉集	校本万葉集、その他
風土記	岩波文庫本
祝詞	岩波文庫本
琴歌譜	日本歌謡集成、記紀歌謡新解
先代旧事本紀	国史大系本、記紀歌謡新解
皇大神宮儀式帳	群書類従、記紀歌謡新解

国語擬声語の原始形態

でも、さうした古い時代に用ゐられてゐる単純素朴な擬声語(疊語)がその儘現代まで継承されてゐて、その意義形態等に何等発達変遷の跡がみられないとすれば、それを以て未進化の言語と認めざるを得ない訳であるが、果してその様な事実が存在し得るであらう。斯様なことが凡そあり得ないであらうといふことは、常識的にも容易に判断し得る。尤も、この問題も既に一応解決されてゐると云へないこともない。私は参考迄にサビアの次の様な論を引用しておく。

一般原理からいつて、原始民族の言語では、自然音の模倣が根本的に重要であるといふ気がどれほどしても、事実としては、これらの言語に擬音語を特別に好む様子は見えない。アメリカ土着の最も原始的な民族中の、マツケンデー河畔のアサバスカ族(Athabaskan)は、擬音語のほとんど、いや、全く欠けてゐるやうに思へる言語を話してゐる。しかるに英語やドイツ語のやうな、不純になつた言語では、擬声語が自由自在に用ひられてゐる。(サビア「言語」ことばの研究序説「木坂千秋訳、七頁」)

註1 わが国には江戸時代に随分奇抜な論が沢山ある。嘗てフランスの言語学会に於いては、この問題を今後論ずることを謝絶すると申合せた。

4

原始日本語に於ける擬声語の相貌が果して如何なるものであり、古代の擬声語が如何なる形で發生し生長し継承さ

さて上代擬声語中最も古い形態として考へられるものは、先づ「コフロ〜」系の四箇処であらう。

塩許袁呂許袁呂。晝き鳴して(記、上)
 瑞玉盃に浮きし脂落ちなづさひ皆許袁呂許袁呂。邇(記、下)
 拆竹の登遠遠登遠遠。天之真魚咋魚獸らむ(記、上)
 霜黒葛聞々耶々爾、河船の毛々増々呂々爾、(出雲国風土記)

右の母音「o」(ô)をaに変へると、「カワラ」「タワ、」「(〜)サラ〜」となり、同時代では古事記の「訶和羅鳴」や、琴歌譜の「可和良止由良止鳴る」や、万葉の、多麻河にさらす手作佐良良爾何ぞ。この児のこだこかなしき(巻十四、3373)

があるが、「カワラ」は奈良朝以後絶え、「サラ〜」のみ次代以後現代の「お茶漬さらさら」まで使はれて、水、雨風、簾、籠、数珠等の触れ合ふ擬音を表はしてゐる。風うち吹きて海のおもていとさわがしう、さらさらとさわきたり(蜻蛉、中)

すだれをさらさらとかくるさまなどぞ(枕、六)
 これらが擬音語として使はれてゐたのに対して、一方「ワ、」は、
 白かしの枝も多和雪のふれば(万、卷十 2315)
 秋萩の枝もたわわにおける白露(古今、秋上)
 桓根もたわに咲ける卯の花(後撰、夏)

枝もたわむばかり咲き乱れたり(源氏、若菜下)
等孰れも擬態語となり更には動詞として使はれてゐる。尤も万葉集では「タワ、」より古い「トラ、」からして既に擬態語として、

秋萩の枝も十尾^{トヲ}二降る露の(巻八、1595)

春さればしだり柳の^{トヲ、ニモ}十緒^{トヲ、ニモ}妹が心に乗りにけるかも(巻十、1896)

秋萩の枝も十尾丹露霜おき(巻十、2170)

白樺の枝も等乎平爾雲の降れば(巻十、2315)

等と使はれてゐる。

なほ「コヲロ」が平安時代では、

^(興コ) 鞍櫃ノ様ナル物ノ有リケルガ、人モ寄ラヌニコホロト。鳴リテ蓋ノ

開ケレバ(今昔物語、廿七)

となつてゐることを考へると、万葉の「ホロ」もこの系統であることが解る。

天雲を富呂爾^{フミル}ふみあたし鳴神も(巻十九、4235)

「コヲロ」と同じ[○]([○]母音階調の系統と云ひ得るもので、上代擬声語中、最も広く用ゐられてゐた語に「トシロ」

(「二箇処」)「トシ」(「二箇処」)がある。これが「トラ、」

等と相違する点は、破裂音[t]による語幹「トシ」の擬音

的表現価値が高い点であらう。有声破音の[d]が現代でも、

ドン、ドンドコ、ドカン、ドカツ、ドカリ、ドカ、ド

ロン、ドロ、ドロン、ドクンバンヤン、ドタバタ、

滔々が水音であり、鏗々、鞞々、鞞々、鑿々等は孰れも鐘鼓等の響きの形容に用ゐられてゐる。

「トシ」系の一四箇処に次いで使用度の多い語は「ユラニ」「モユラニ」「ユラ、ニ」「ユラ、ニ」「カワラトユラト」「ヤラ、ニ」等の計一三箇処を数へる「ユラ系」の語彙である。而してこの系統は、風土記を除く主なる上代文献を悉く網羅してをり、先づ

即ち其の御頸珠の玉の緒母由良邇取由良迦志て(記、上)

の「ユラニ」が擬音語であることは、記伝の「緒に貫る玉どもの働きて相触つゝ鳴さまを云」を俟つまでもなく、

素戔乃鳴尊讎讎解其左髮所纏五百箇統之瓊論。而瓊響瑠濯濯浮於天渟名井(紀、一)

の訓註に、
瑠々乎比云奴難等母由羅爾。(嘉元本、日本紀私記)

とあり、こゝにいふ「奴難等」が「瓊な音」即ち「玉の音」である。漢語の「瑠々」は詩経小雅に「八鸞瑠々」として、玉或は楽器の鳴る音の形容に用ゐられてゐる。

ところで右の「ユラニ」が次の

天照大御神先づ、建速須佐之男命の佩かせる十拳劍を乞ひ度し

て、三段に打ち折りて、奴那登母母由良邇。天之真名井に振り滌ぎ

て佐賀美邇加美て吹き棄つる気吹の狹霧に成りませる神の御名は

(記、上)

バタリ、ドシリ、ドシン、ドシヤン、ドシヤ、ドウ
、ドブン、ドボン等々極めて頻繁に用ゐられ、大砲小銃その他の弾丸発射の音、炸裂音、爆破音、非常に重い大きな物体が墜落又は倒壊した時の音響、太鼓の音、足音の入り乱れる騒音、轟音、震動、滝の音、水に没する音等々頗る多角的である。これが上代には、

溟渤鼓に漫ひ、山岳鳴り响えき(紀、神代上、一)

を始めとして、万葉集では、滝の音、6 (2717・2840・3232

・3233・3392・3617)、波の音、2 (600・3385)、馬の蹄

の音、2 (2653・4110)、板戸を敲く音、1 (3467)、及び

秋されば山も動響爾^{トヲ}さを鹿は妻呼びとよめ(巻六、1050)

打つなる瓠は宮も止々個爾(皇大神宮儀式帳)

の様に、具体的に何々の音といふよりも、とよみ、鳴り響

き、轟き渡るといつた様な鳴動反響の形容として用ゐられ

てゐる。次代では

五月雨の空もとゞろに。時鳥何を憂しとか夜たゞ鳴くらむ

(古今、三)

二十人の伴僧を率て御加持参り給ふ足音、とゞろとゞろと踏み鳴ら

さるる(紫式部日記)

浅水の橋の、止止呂止止呂止、降りし雨の(催馬楽、浅水)

等へ続き、一方、トシロク、トシロカス、トシロコス、ト

シロメク、トシメク等の動詞を形成してゐる。又、漢語の

では、「ユラニ」ではなくして「モユラニ」であつて、語頭に「モ」が一音附加してゐるばかりか、その語の意味も些か変な気がする。この点は宣長も既に指摘してをり、下文の珠のことを云つてゐる箇処の文句が紛れて伝へられたものとしてゐる。しかしすぐ次の

天照大御神の左の御美豆良に纏かせる八尺勾璫の五百津の美須麻流珠を乞ひ度して(云々)

では、右の「云々」の部分に前記と同じ文句があつて、珠の音の形容となつてゐる。この「ユラ」といふ音感が、現代語の語感からすれば、どうしても「ユラ、ニ」揺れる」の場合の様に、擬態語としか解し難いものである。然し乍ら、その子音[j][r]が、舌端を硬口蓋、齒茎に近づけ又は接触させて出す音であり、又[r]が円転流動の象徴音である点から、古代人が「ユラ」を玉の触れ合ふ靈妙な響きの形容としてこれを用ゐてゐたことには、今更乍らその感覚の鋭敏さに敬服させられる。

しかるにこれを万葉集の場合に徴してみると、
足玉も手玉も由良爾織るはたを(巻十、2065)

手に纏ける玉も湯良羅爾。(巻十三、3243)

等は「珠玉」の揺れ又は鳴る音の形容と解されるが、一方

まき持たる小鈴も由良爾。手弱女に我はあれども(巻十三、3223)

白塗のを鈴も由良爾合せ遣り(巻十九、4154)

等には「小鈴」の擬音にまで使はれ、前記古事記の「十拳劍」の場合と同様に、濫用されてゐるところに問題があり、遂には、

布留部、由良由良止、布留部（先代旧事本紀、天神本紀）

に至つて擬態語化し、「ユラク」「ユラカス」等自他動詞を始め、ユルグ、ユルガス、ユル、ユルム、ユル〜、ユルラカ、ユルヤカ等々、緩徐な蕩揺の状態模写から弛緩、緩慢の情を表はすものにもまで發展する。次代の、御くしはゆら〜と清らにて（源氏、賢木）

を始めとして、その他この時代に用ゐられてゐるものは殆ど毛髪のふさ〜とした状態の形容である。なほ万葉集には、同系の擬態語として、大体次の様なものがある。

吾が心湯谷絶谷（巻七、1352）

大船の由多邇（巻十一、2367）

其の夜は由多邇あらましを（巻十二、2867）

大船の往良行羅二（巻十四、3274）

大船の由久良由久良邇（巻十四、3962、4220）

漁する海人の楫音湯鞆干に（巻十四、3174）

岩もと〜ろに落つる水よにも多由良爾我が思はなくに（巻十四、3392）

出づる湯のよにも多欲良爾児ろが言はなくに（巻十四、3389）

又、

鱸が躍動して立てる波の音と解すべきかは速断し難いが、

孰れにしても擬音語に相違ない。又、

木鍬持ち打ちし大根佐和佐和邇汝が云へせこそ（記、下）

木鍬打ち打ちし大根佐和佐和珥（爽、清々）汝が云へせこそ（紀、十一）

の場合や、又、

珠衣の狭藍左謂しづみ家の妹にも言はず来て思ひかねつゝ

（巻四、503）

あり衣の佐恵佐恵しづみ家の妹に物言はず来て（巻十四、3481）

の場合は、木鍬で打つ音或ひは衣づれの音の形容以外に擬態的な意味にも使はれてゐる。

冬木のすからが下樹の佐夜佐夜（記、中）

なづの木の佐夜佐夜（記、下）

なづの木の佐椰佐椰（鐙々）（紀、十）

小竹の葉はみ山も清爾さやげども（万、巻十一、1133）

あしびきのみ山も清落ちたぎつ芳野の河の（万、巻六、920）

等の「サヤ」が母音[a]から[o]（ō）に変ると「ソヨ」になり、

はた芒本葉も具（其）世丹秋風の吹き来るよひに（万、巻十、2089）

枕も衣世二嘆きこるかも（万、巻十二、2885）

負ひ征矢の曾与等鳴るまで嘆きつるかも（万、巻二十四、398）

平安時代の「源氏」「枕」その他の擬音語「ソヨ〜」と

なり、汎く用ゐられ、これが現代語の微風の形容まで続い

天人の作りし田の石田は稻植、石田は已男作れば可和良止由良止鳴る、石田は稻植、石田は稻植（琴歌譜）

右の「カワラトユラ」の「カワラ」が、

故れ訶和羅之前に到りて沈み入りたまひき。故れ鈎を以ちて、

其の沈みたまひし処を探りしかば、其の衣の中なる甲に繫りて訶

和羅鳴。故れ其の地の号を訶和羅前とは謂ふなり。（記、中）

によれば、鈎が甲に繫つて鳴つた音であり、従つて、これが現代語のカツツ、カタ〜、カバ〜、カチン、カチャ

ン、カサ〜、カン〜、カン、カツン、カランコロン等

の「カ」の音が孰れも、金属、石、木等の堅い物体の衝突

音、摩擦音等に用ゐられてゐる点に通じてゐる。「トユラ」

は「モユラ」の語頭子音[m]と[t]とが相違してゐるものであ

り、音感からは「ト〜」や「トラ」、「の場合の[t]と同様で

あるから、やはり擬音語と思はれる。

又「ヤラ、ニ」は、擬態語とみれば、

手掌撻亮。此云陀那則拳謀耶羅羅備。拍上賜。（紀、十五）

の場合は「ヤンワリト」にあたる訳だが、「文選註」では

「声の清徹る貌」とある。

第三には「サワ〜」及び「サヤ〜」系の「一箇処で

これに「ソヨニ」「ソヨト」を含めて「三箇処となる。

釣為る海人が口大之尾翼鱸佐和佐和邇控き依せ騰げて（記、上）

を海人たちが呼びあふ声の噪しさ（記伝）ととるべきか、

てゐる。「騒ぐ」の古形「サヤグ」以下サヤカ、サヤケ、

サヤケン、サワヤカ及びソヨグ（奈良時代になし）、ソヨ

メク等諸他の品詞の形成に關聯してゐる。

その他、万葉の「ブ」（蜂音）を初めとして、

鼠来て云ひけるは「内は富良富良。外は須夫須夫」（記、上）

其の海水の都夫多都時の名を都夫多都御魂と謂ひ（記、上）

しなだゆふ葉浪路を須久須久登吾が行ませば（記、下）

十握劍を抜きて寸に其の地を斬る（紀、神代上）

段に斬ると言ひし所をば、今布都奈の村といひ（常陸国風土記）

入江漕ぐる楫の音の都波良都波良爾（万、巻十八、4065）

の七語と、鳥獸の鳴声を写した「イ」（馬声）、「ム」（牛鳴

系）

鹿……その声ひたりき、鳴く声ひたり。（播磨国風土記）

俗の説くところ、猿の声を謂ひて古古と為す（常陸国風土記）

筑波嶺に可加鳴く鶯の（万、巻十四、3390）

樺津の檜橋より来許武狐に浴むさむ（万、巻十六、3824）

からすとふおほそ鳥のまさでも来まさぬ君を許呂久とぞ鳴く

（万、巻十四、3521）

の七語、及び、「持ち可呑呑みてむ、如此可呑呑みてば」（祝詞）

「サ」、「神葉声」、「早川に洗ひす、ぎて辛塩に古胡登採み」

（万、巻十六、3880）の三語が夫々同系と目される。又、

この床の比師跡鳴るまで歎きつるかも（万、巻十三、3270）

しはぶかひ鼻毗之毗爾。(万、卷五、592)
 笹葉に打つや霰の多志陀志邇率寝てむ後は(記、下)
 の三語も一応同系と思はれるが、「ホラ〜」(記)と、「クルヤ〜」(風)は系統不明であり、やはり擬態語かも知れない。

さて最後に上代の擬音語を音節反復型の疊語と然らざるものに分けてみると、全語彙数四二語中二四語が疊語であり、その比率は五七%、他は四三%となる。今これを示すと

形態/資料	記	紀	万	風	祝	その他	計	比率
反復型節	8	1	9	4	1	1	24	57%
その他	4	2	10	1	10	1	18	43%

又母音階調のものとならざるものとの比率も、偶々同数となつてゐる。

形態/資料	記	紀	万	風	祝	その他	計	比率
母階調型音	8	2	10	4	1	0	25	60%
その他	4	1	9	1	0	2	17	40%

又音節反復型と母音階調の語とを合計すると三三語で、

全体の七九%を占め、従つて他は僅かに二一%にすぎず、ユラ、モユラ、ユラ、カワラトユラの四語と、コロク、コム、イ、ブ、ムの五語、計九語である。ユラ系の四語以外はすべて鳥獸の鳴声を写した擬音語である。^{註1}

註1 「説林」第三卷、第八号、抽稿擬音語の言語的性格(三三)参照。なほこれらを擬聲音と見做すべきか否かは未だ問題であるが、擬音語中最も単純素朴な形式はやはり一音節語と云へよう。疊語の中でも、コ、カ、カ、カ、サ、トド、コ、の七語(一音節反復語)も極めて原始的形態と云へよう。

かりに猿声「古古」一語をとりあげてみるでも、それが到底現代語の「キヤ〜」には及ばぬし、又「万葉集」三八八〇能登の民謡「辛塩に古胡登。毛美」の場合にしても、「物を採む時鳴る音、こちこち」(言泉)は別としても、「ゴシゴンと採んで」(全釈)、「ぐらぐいと採んで」(万葉辞典)、「辛い塩でクツクツと」採んで、「(新釈)、「辛い塩でこりこり採み」(全註釈)等と比較して凡そ現代語の表現価値には及ばないのである。

これを分類してみると、
 一、疊語 一二四語

1、一音節反復語 七語(母音階調7)

- カ、カ、カ、サ、 (aa)
- コ、コ、コ、ト、 (oo)
- モ、 (ii)

- カワラ、ヤラ、 (aaa)
- ト、 (ooo)
- モユラ (oua)
- ユラ、 (uaa)
- コロク (oou)
- 4、その他 一語
- カワラトユラ (aaa/oua)

あとがき

以上私はわが国上代の擬音語(擬音語)に就いて、極めて不完全な調査を報告する訳であるが、これはもとより擬態語並びに動詞等諸他の品詞にみられる語源的擬音語等をも精査して、その音韻、意義、用法を究め、これが次代以後の言語現象に如何なる形で影響し伝承されてゆくかを問題としなければ何等結論に導くことは出来ないが、それは他日を期して纏めてみたい。

なほ、上代語に於ける言語意識と國語表記の問題に關聯して、上代の擬音語が、大化改新を中心とする中央集権制の確立によつて、雅俗語の乖離、文語と口語、漢語と倭語、中央語と地方語との離反等の問題を史的に展開して別稿に論ずる予定である。

〔小稿は昭和廿六年七月に研究発表(於、立命館大学)したものである。なほ古事記の擬音語に就いては春日和男氏の所論に負ふところが大きかったので厚く謝意を表します〕

2、二音節反復語 一二二語(母音階調6)

- サヤ〜、サワ〜、サラ〜 (aa/aa)
- スク〜、スブ〜 (uu/uu)
- ビシ〜、 (ii/ii)
- サキ〜、タシト〜 (ai/ai)
- サエ〜 (ae/ae)
- ツタ〜、ユラ〜 (ua/ua)
- ホラ〜 (oa/oa)

3、三音節反復語 五語(母音階調3)

- ユラロ〜、トラ〜、モソロ〜 (ooo/ooo)
- ツバラ〜 (uaa/uaa)
- クルヤ〜 (uua/uua)

二、その他 一八語

1、一音節語 三語

イ、ブ、ム

2、二音節語 八語(母音階調6)

- サヤ (aa)
- ツブ、フツ (uu)
- ヒシ (ii)
- ソヨ、ホロ (oo)
- ユラ (ua)
- コム (ou)

3、三音節語 三語(母音階調3)